

CASE

1

障害特性により体幹が弱い子どもが多い施設

施設の悩み

- 体幹が弱い2～3歳の子どもが多く、転んでしまう子や運動への苦手意識がある子がいる
- 「できない」ために子どもたちが運動に集中できず、職員による個別のサポートが難しい

運動プログラムの内容

発達順序に沿った運動の獲得で子どもたちの「できる」体験を引き出す

①運動を楽しめるようになるための基礎運動の獲得

施設で取り組んでいるリトミックやサーキットの内容をより効果的なものにするため、横転運動、ハイハイ、高這い、片足立ちなど発達段階をおさえたメニューを取り入れました。施設職員と一緒に子どもたちの躰いている段階を確認した上で動きのサポートを行い、「できる」ことを積み上げていきました。



横転運動(ごろごろ)で
身体を上手に使う練習



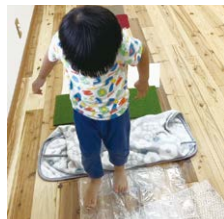
ハイハイは段ボールくぐりで空間を制限し、
身体をしっかり支えることで体幹筋の促進



タオルそりで掴む力と体幹を強化



高這いで身体の動かし方や
コントロールを学ぶ



色々な刺激の上を
歩いて感覚調整



片足ずつまたぐ動作から、
両足ジャンプへ



自分でリングの位置を変えるなど
応用しながらの取り組み



指導団体の声

職員さんも「発達段階」をおさらいすることで、子どもの運動の課題や支援方法をつかみやすくなります。取り組む目的やポイントさえ明確になれば、色々な展開が可能です。



<玉・的入れ> 色々な紙質をちぎって丸め、箱・的に入れます。箱・的位置は投げるのが難しい子どもでも手を伸ばすと届く位置にすると、効果と同時に達成感が得られます。

1つのゲームで、手首や指の操作性向上やしゃがみこみ、玉を投げる動作など多様な経験を積むことができます。



指導団体の声

コノアス合同会社 児童発達支援 はぐちるランド綾瀬(葛飾区)

- 施設利用者 障害種別・程度：発達障害の疑いがある2歳～年長の子ども
車いす利用者：なし
- 参加人数：10人程度 ●サポート職員数：5人程度

②ひとりひとりの支援につなげる工夫

リトミックなど一斉に取り組む運動のほか、一人ずつ順番に複数の運動に取り組むサーキット形式を取り入れ、子どもたちが適切な動きができているかの確認や、必要な補助を職員が行いやすくしました。普段施設で取り組んでいる活動をご家庭にも繋げるために、親子プログラムも実施しました。



サーキット内のそれぞれの種目で職員が補助



子ども達が講師の説明をしっかりと見て聞いている様子



親子プログラムでは、親子でふれあいながら楽しめる運動を実施



保護者の声

得意不得意な体の動かし方があると勉強になりました。家でもできそうな事があったので、真似してやってみます。



施設職員の声

夏から取組を始めて、子どもたちなりに取り組み方や体の動かし方がわかってきたと思います。成長が嬉しいです！

易



難



公園の遊具は発達にあわせた選択で安全性確保
(姿勢を保持する力と滑り台の長さや傾斜、スピードコントロールのしやすさなどを考慮)

福祉施設からの声

子どもの成長を感じた運動プログラム

様々な発達段階の子どもたちがいる中で、「サポートの方法」や「遊びの中で行う体づくり」が職員間でうまくイメージできないことが悩みでした。「子どもの発達段階」「抱える課題と原因」「それに繋がる遊び」を1年間のプログラムで学ぶことができました。また、サーキットや体操などに取り組む中でも、支援の目的や日々の積み重ねの大切さを、子どもたちの遊びの幅の広がりや活動範囲の広がりから感じることができました。また、衝動の高さから最初は指定の場所で「待つ」ことが難しかった子どもたちも徐々に待つことに慣れ、スムーズに活動を行えるようになっていったように思います。親子プログラムも好評で、保護者に子どもたちの現時点の姿を見てもらう良い機会になりました。

指導団体からの声

職員と子どもたち双方の「できる」「楽しい」経験が相乗効果を生む

職員さんが子どもの発達段階に合わせた活動内容を臨機応変に組み合わせ、プログラムの引き出しを多く持てるようになることを目標に取り組みさせて頂きました。回を増すごとに職員さんの子どもたちの動きの変化を捉える力や発達段階に合わせた個人への支援方法も良い方向に変化し、運動を実施する上で良い環境づくりができたように思います。子どもたちも活動の中で、「できる」や「楽しい」という自信がついたことで、活動の幅も広がっていき、運動面だけではなく社会性など毎回様々な面で成長を感じることができたことが、私達もとても嬉しかったです。

(一般社団法人こみゅステージ 所長・代表理事 塩田 琴美さん)